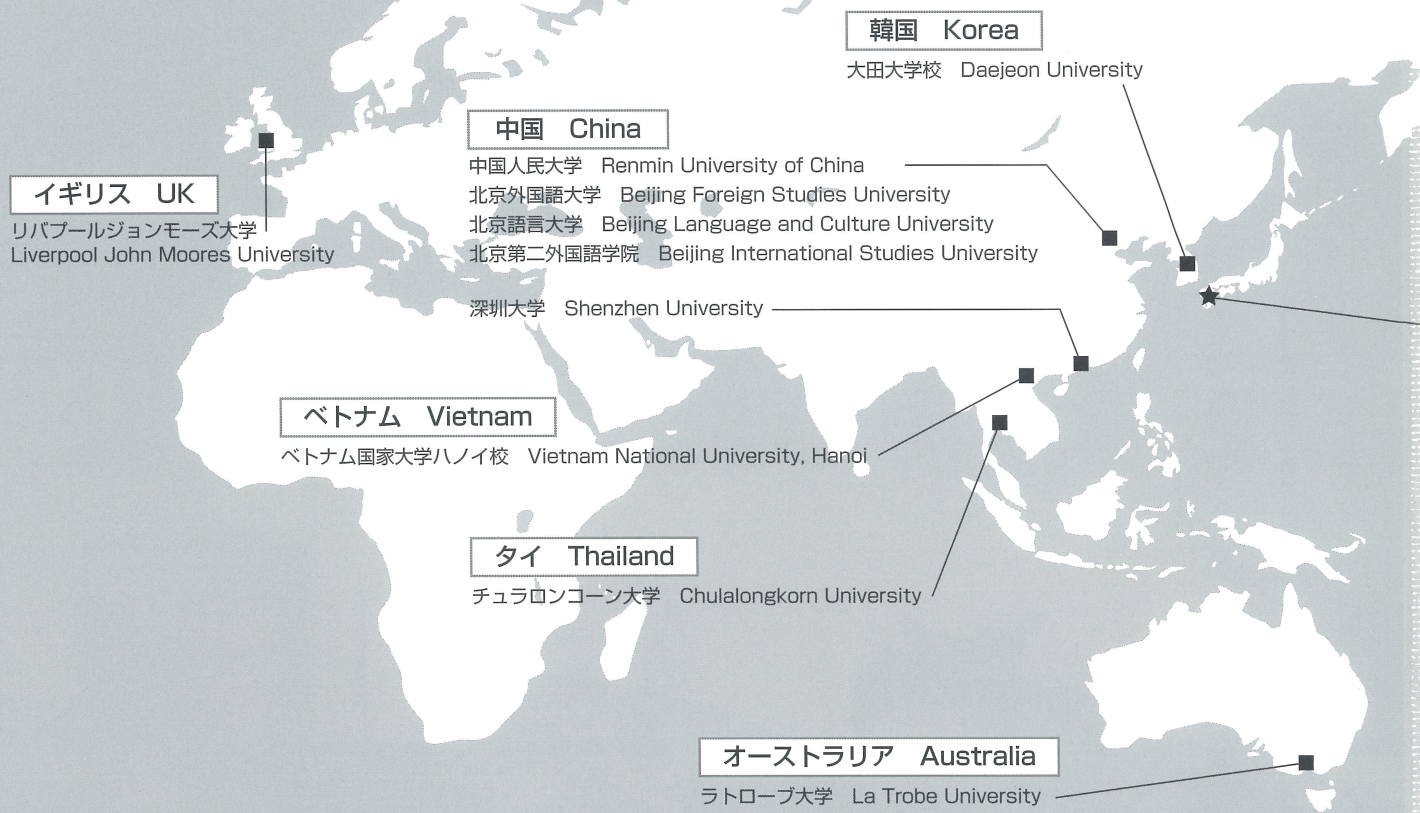


国際交流レター

2008 vol.30

International Exchange Letter





目次

| | | |
|-----------|---|---|
| 巻頭言 | 国際交流委員長 中野裕治 | 2 |
| TOPICS | 第18回外国人留学生弁論大会 危機管理セミナー | 3 |
| 授業風景 | 応用演習（経営学科） 国際コミュニケーション演習（ホスピタリティ・マネジメント学科） International Relations and Current Issues（国際経済学科） | 4 |
| 留学先で学んだこと | セント・メアリーズ大学（カナダ）／岡田慶子（ホスピタリティ・マネジメント学科3年） リバプールジョンモーズ大学（イギリス）／松岡由起（英米学科5年） ラトローブ大学（オーストラリア）／中川裕里加（英米学科4年） 深圳大学（中国）／宮崎みどり（東アジア学科4年） ベトナム国家大学ハノイ校（ベトナム）／吉永貴史（経営学科3年） チュラロンコーン大学（タイ）／岩下大輔（英米学科5年） | 8 |



日本 Japan

熊本学園大学
Kumamoto Gakuen University

カナダ Canada

カールトン大学 Carleton University
セント・メアリーズ大学 Saint Mary's University

アメリカ U.S.A.

ウィスコンシン大学オークレア校 University of Wisconsin-Eau Claire
モンタナ州立大学 Montana State University
モンタナ大学 The University of Montana
キャロル大学 Carroll College
インカーネットワード大学 University of the Incarnate Word

ニュージーランド New Zealand

ユニテックニュージーランド大学 Unitech New Zealand

熊本学園大学の交流協定校

| | | |
|----------------|---|-----------|
| 交換教員 | 李 在 康 大田大学校副教授 (韓国・大田広域市) 彭 勃 深圳大学副教授 (中国・深圳市) 岡本 恵也 経済学部教授 (韓国・大田広域市 大田大学校へ派遣) | 14 |
| 卒業生紹介 | 三浦 雅子 (熊本商科大学商学部経営学科卒業) | 19 |
| 国際交流写真館 | | 20 |
| DATA | 2008年 海外往来 2008年度 出身国(地域)別外国人留学生数 2008年 留学生参加行事 交換教員往来 2008年 研修団往来 | 22 |



非日常から日常へ

国際交流委員長 中野 裕 治

本学の国際交流が本格的に始まって、すでに四半世紀が経過した。私自身、交換教員第一号としてモンタナ州立大に派遣されたのが1984年の夏であるから24年前のこととなる。

その年、海外研修者としてボストンのコーネル大学に留学予定の坂本 正教授（現学長）と共に商・経両学部（当時は2学部および短大体制）にて送別会をしてもらったことを覚えている。帰国したらしたで帰国報告や熊日への寄稿（2回連載）など、今にして思えば、随分と重宝がられたものである。留学といえば、歓送迎会が付きものの時代であった。

その後、教員派遣について言えば、モンタナについては16名、韓国・大田大学校は17名、そして中国・深圳大学には6名、計39名の先生方が一年ないし半年の留学をされている。この間、歓送迎会も次第に縮小され、いまやこぢんまりとした私的な「集い」へと変化を遂げた。本学の先生方にとって留学はいまや「非日常」ではないのである。

学生諸君の留学機会も随分と増えた。長期（1年）、短期（半年）、ホームステイ・プログラム（約ひと月）のほかに、外国語学部や経済学部には、正規授業の一環として「海外研修」なる「科目」があり、これらを合わせると実に毎年約200名の諸君が海外を体験していることになる。海外から本学にやってくる学生諸君も随分と変化してきた。かつては東洋のミラクルと呼ばれた経済成長の「秘密」をたずねて、日本に来た諸君が多かったように思われるが、バブル崩壊後は日本の文化（映画、アニメ、音楽など）や歴史に魅せられて来る学生も少なくない。また、最近高校時

代にいちど日本に来たことがあるという学生も珍しくなく、日本語能力が年々高くなりつつある。

それを実感させられるのは、毎年おこなわれる「外国人留学生弁論大会」である。最近はただ日本語がうまいというだけでは優秀賞はもらえない。内容勝負に変わってきたのである。また、当初より中国および韓国からの留学生の参加が多く、最優秀賞は当然ながら両国の間で競うというのが常であった。それが近年変わりつつある。英語圏からの参加者も増えており、今年（第18回）の最優秀賞はニュージーランド（ユニテックニュージーランド大学）から来たキム・デニー君が勝ち取った。タイトルは「方言」で、彼が友人と県外に旅行した際、「あんパンください」といって店の人を困らせた時のエピソードを紹介し、会場を沸かせた。無論、彼は綺麗な共通語も話せる。教室から出て「生きた言葉」を使用する必要を説いたのである。熊本弁を理解し、自由に使える「英語圏」からの留学生が登場したのであるから、本学の国際交流は将来に「日常化」しつつあるといえよう。

それでも尚、異文化接触・相互理解の必要性は高まりこそすれ、減ずることはなからう。グローバル化が現代社会のキーワードのひとつであることに変わりはない。オンリー・ワン・アース（Only One Earth）といわれて久しい。だが、世界が近づけば近づくほど、摩擦の可能性が高まることも事実である。日本人・外国人を問わず、本誌に寄稿してくれた人びとが熊本や海外での思い出を糧にして、未永く「親善大使」として活躍されることを願ってやまない。



第18回外国人留学生弁論大会

第18回外国人留学生弁論大会が2008（平成20）年6月14日（土）、学生会館4階多目的ホールで開催された。本学には11カ国112名の留学生が在籍（平成20年5月1日現在）しており、今年は昨年のおよそ2倍の人数にあたる9カ国18名の留学生が参加し、熱弁を奮った。

多人数の留学生が弁論を行い大会は長時間に渡ったが、興味をもてる身近なトピックに、聴衆は席を立つことなく熱心に聞き入っていた。

最優秀賞はニュージーランドからの留学生キム・デニーさん。熊本の「方言」を取り上げ、「せっかく熊本に来たのに熊本弁を学ばないのはもったいない、この留学期間熊本人になろう、と考えて熊本弁を学ぼうと思いました。方言はそれぞれの地域の特徴や文化を表すことができる大事なツール。標準語だけではなく方言もマスターし、熊本を理解したいです。」と熱く語った。

キム・デニーさんは最優秀賞のほか、聴衆者の投票によって選ばれるオーディエンス賞も獲得した。また、「私のダイエットの経験」のテーマで弁論した韓国からの留学生河受旻さんも同票でオーディエンス賞を獲得。2名のオーディエンス賞同時獲得は大会開催以来初めてで大いに盛り上がった。



▲中野裕治国際交流委員長から表彰を受けるキム・デニーさん(左)と河受旻さん(右)

審査結果

| | | | | | | |
|----------|--------------------|---------------------|----------------------|---------------------------|----------------------|--------------|
| 最優秀賞 | ホスピタリティ・マネジメント学科2年 | デニー Danny | キム Kim | New Zealand (ニュージーランド) | 「方言」 | |
| 優秀賞 | 国際経済学科3年 | レジーナ Regina | ホワイトヘッド Whitehead | Canada (カナダ) | 「私が乗り越えられた体験」 | |
| | 東アジア学科4年 | ユックジョン 陸 | フン 正 勲 | Korea (韓国) | 「韓国の銭湯文化～チンジルバンについて」 | |
| 敢闘賞 | 東アジア学科3年 | グエン Nguyen | ティ Thi | チャン Trang | Vietnam (ベトナム) | 「一期一会」 |
| | 東アジア学科4年 | ハ 河 | ス 受 | ミン 旻 | Korea (韓国) | 「私のダイエットの経験」 |
| | 経営学科3年 | ショウ 肖 | イツ 一 | コウ 航 | China (中国) | 「初めての留学生活」 |
| | ホスピタリティ・マネジメント学科2年 | タンカンコ Tangcangco | デニス Dennis | Philippines (フィリピン) | 「HERO」 | |
| オーディエンス賞 | 経営学科2年 | サイ 崔 | メイ 明 | シン 清 | China (中国) | 「コイン」 |
| | ホスピタリティ・マネジメント学科2年 | デニー Danny | キム Kim | New Zealand (ニュージーランド) | 「方言」 | |
| | 東アジア学科4年 | ハ 河 | ス 受 | ミン 旻 | Korea (韓国) | 「私のダイエットの経験」 |

危機管理セミナー開催

教職員向け「危機管理セミナー」が12月24日（水）午後1時から、本学の図書館A Vホールにて行われた。政治、経済、社会、病気といった面で不安定な世界情勢の中、海外に多くの学生を派遣している本学が、万が一の危機に適切に対応できるよう企画したもの。学長や国際交流委員長をはじめ、学部長、学科長、教職員など計29名が参加した。講師は日本エマージェンシーアシスタンス株式会社の河合克浩氏。

セミナーの開始にあたって、坂本正学長が、本学の国際交流の状況やこれまでの危機管理に関する経験を踏まえ、挨拶をした。

セミナーの冒頭、河合氏は外務省危機管理ビデオを上映したあと、海外で起こりうる様々な危機の例を挙げシミュレーションをしながら、大学の組織としての対応の範囲・スタンスをしっかりと決めておかなければならない、と強調した。

最後に設けられた質疑応答では、複数の教員から保険やアシスタンスについての質問や感想が寄せられ、約3時間のセミナーは終了した。



本学には、100名を超える私費留学生と交換留学生が在籍して様々な視点で進められる授業は、日本人、外国人両方の学生にその中のいくつかの科目を、担当教員、留学生、日本人学生の

応用演習

Seminar

内容は、経営組織の基本理論や組織デザイン論の研究です。企業行動の背後にある市場・戦略・構造を結びつける論理を身に付けることをねらいとし、組織について学ぶゼミです。授業は日本人も外国人留学生も区別なく、同じ条件で進められます。

中野 裕治 教授

(経営学科)

石浩くんは中国・瀋陽市出身の留学生で2年近くの付き合いになります。河内地区での企業訪問やゼミ大会、コンパなど積極的に参加してくれました。特に昨年秋の西日本ゼミナール大会では、「成果主義の導入をめぐる」の標題のもと、福岡大学の三浦ゼミとの「討論の部」に参加しましたが、石くんが自分の担当範囲を越えて「やりあって」くれまして、お陰で本学優勢に終えることができました。「日本経営の明日へ向かって－雇用・賃金の日中比較を通して－」と題する卒論の完成を期待しているところです。

丸山 明日香

(経営学科4年)

応用演習Ⅱ(中野裕治ゼミ)は、日本人学生18名、中国人留学生2名で活動しています。留学生と共に講義を受けることは、他国の目が入ってくるということで、緊張感もあり、お互いにとってもいい刺激になっていると思います。日本人である私たちとは違った見方からの意見や質問は、学ぶことも多く、またひとつの考えに固執しない広い視野を育てるように思います。国籍の違いという垣根を取り払って対等な立場で意見交換や交流をする機会があるということは本当に素晴らしいことです。ゼミ内の勉強・活動に限らず、他国の文化や人々に触れることは、日本や私たち自身を見直し、深く知ることにつながると改めて感じています。

石 浩

(経営学科4年) 中国・瀋陽出身

私が所属している応用演習は、「経営組織論」について勉強している。

ゼミのやり方は、基本的に自分で勉強し、担当する分をレジュメに作成し発表する。日本人、留学生関係なく、誰でもきちんと担当する分を発表しなければならない。このやり方のもとで、個人の能力が鍛えられ、大学での勉強法を定着させる。

ゼミ活動として、3年生しか参加できないゼミ大会や学内発表などに参加する他、飲み会もある。全員で共同作業するので、人とのコミュニケーションや、チームワークなどが鍛えられる。4年生になると、企業見学がある。企業に行くと、実際に現場でどういうやり方で仕事をしているのか見て、自分たちが勉強しているものと結びつけ、よりいい方向を探す。

私にとって、中野応用ゼミは、自分でしっかり勉強しなければいけないゼミであり、特別扱いしないので、力をつけるゼミでもある。



(左から) 石浩くん、中野裕治教授、丸山明日香さん



おり、多くの授業で日本人学生と留学生が共に勉強しています。
とって刺激的なものとなっています。
それぞれの立場から紹介してもらいました。

国際コミュニケーション演習 International Communication Seminar

英語によるコミュニケーション能力を高めることを目的とする科目であるため、授業は基本的に英語で進められ、外国人留学生も交えて行われています。外国人とのコミュニケーションが取れる能力を身に付けることを目指し、単に語学の学習だけでなく言語や文化を超えたコミュニケーション能力の習得を通じて、ホスピタリティとは何かということにも触れる授業です。

土井 文博 准教授

(ホスピタリティ・マネジメント学科)

このクラスは、ホスピタリティ・マネジメント学科2年生を対象に開いていますが、ここで第1に大切にしているのは、コミュニケーションを楽しむことです。コミュニケーションとは、人に伝えたい、人を理解したいという気持ちから始まるので、Enjoyが基本的な姿勢です。つぎに、伝えたいけど伝わらない、分きたいけど分からないという状況にも直面します。これも大切なことで、こうした気づきがなければスキルアップも望めません。さらに、ダンのコメントにもあるように、言語を超えたコミュニケーションを体験し、ホスピタリティとは何かと考えるのも、ここでの大切な目的です。



Daniel Settelen (ダニエル・セトレン)

平成19年度交換留学生 (モンタナ州立大学)
Exchange Student 2007, Montana State University

During my year at KGU I had the opportunity to take classes with other Japanese students. Professor Doi's "International Communications" class was one that I found particularly interesting. The objective of the class

was to investigate communication, generally through media, conversation and other exercises. An interesting thing to note is, this class was not for English majors, but instead it was a Hospitality Management class. This added to the difficulty sometimes, knowing that English would not be a form of communication to always fall back on, which in my opinion realistically extended into my life in Japan. Discussing culturally different gestures and forms of body language broadened my communication abilities beyond verbal language. This was naturally a very interactive class, since the act of communication is one of the largest forms of interaction, which allowed me to meet and get to know a lot of new people. Overall it was a great experience proving that you don't necessarily need to be fluent, or know someone else's language at all in order to communicate with them, just the confidence and willingness to learn.

水野 可奈子

(ホスピタリティ・マネジメント学科2年)

最大の魅力は、楽しみながら交流し、学ぶことができることです。このクラスでは英語しか使っちゃいけないという決まりがあるため初めはとても不安でしたが、ゲームや写真を使って自分の国や家族を紹介したりと堅苦しい雰囲気ではないため今ではまったく苦にならなくなりました。ゆっくりでもわかる単語を並べたりジェスチャーをしたりしながら、コミュニケーションをとっています。

私はこのクラスを通して、伝えようとする姿勢が大切なのだということを知り、積極的に自分から話しかけたりすることができるようになりました。自分の言葉でコミュニケーションを取りたいという気持ちも強くなり、これが長期の留学に挑戦する大きなきっかけにもなりました。



International Relations and Current Issues

日本を取り巻く国際関係の基本的問題を、時事問題を交え国際比較をしながら学んでいく授業です。文化・政治面における国際関係と経済面における国際関係を、国際経済学科の2名の教授から学びます。講義は英語で進められ、外国人留学生も多く履修しています。

Kirk Masden (カーク・マスデン) 准教授

(国際経済学科)

In my half of “International Relations and Current Issues” we discuss recent news that pertains to cultural or political aspects of Japan’s relations with other countries. Through the discussions, students can see the extent to which their own reactions are similar to or different from students of other cultures. For example, this year class discussion revealed that the level of interest in political elections was relatively high among exchange students, particularly those from the U.S. I think this discussion was particularly valuable for the Japanese students who seemed to be surprised by the extent of this interest and the strength of the opinions held by their non-Japanese classmates. For the exchange students, I think this year’s discussions provided insights into the extent of their Japanese classmates’ interest in as well as opinions about various issues in the news.



マスデン先生による講義

Maung Maung Lwin (マング・マング・ルウィン) 教授

(国際経済学科)

The subject, “International Relations & Current Issues”, is one of the most popular and internationalized subjects in Kumamoto Gakuen University (KGU). The Department of International Economics has designed this subject especially for its students and the international exchange students from our partner universities. I have been teaching under the title of “International Economic Relations” (IER), in English, from the perspective of Development Economics. I, myself, am from Burma (Myanmar) and the students of this class are from various parts of the world, such as Australia, Canada, China, Korea, New Zealand, Thailand, UK, USA and Vietnam, and the regular students of KGU. About 25 to 30 Japanese and international exchange students register to take this subject for credit every year. During the lecture, we can share our own political, economic and socio-cultural opinions about international economic relations. Of course, the way we discuss is very open and international which makes our class a place of



マング・マング・ルウィン先生による講義



international relations. It is really a valuable opportunity for me and the students to share our own views through discussion once a week. I do not see any language barriers among the students of different nationalities and cultures during the class. In order to earn credit for this class, the students from English and non-English speaking countries need a willingness to improve their knowledge of IER and make friends with students from other countries.

Erynn Flaherty (エリン・フレティアー)

平成20年度交換留学生 (モンタナ大学)
Exchange Student 2008, The University of Montana

The class is split between two teachers, five weeks tutelage from each teacher. The semester is taught by Professors Kirk Masden and Maung Maung Lwin. The first half of the semester is under Prof. Masden's tutelage in which the class participates in active discussions regarding current issues in Japan, with the inclusion of how it relates to other countries or other countries' viewpoints.

The second half of the class is taken over by Prof. Lwin.



It is under his supervision that the class focuses on International Economic Relations and becomes a lecture-style class. It is during this time that we learn various countries' standings economically in the world and the many contributing factors to being an economically sound country.



鬼塚 朋美

(国際経済学科3年)

この授業は、日本人学生と留学生が一緒に肩を並べて、日本で起こっている政治的・国際的な問題（たとえば、自衛隊の田母神氏の論文問題や外国人の温泉拒否問題など）についてディスカッションをしています。授業は英語で進められています。

前半のマスデン先生の講義では、外国人が日本で受ける差別について、後半のルウィン先生の講義では“International Relation”とは？といった事柄を中心に講義が進められました。

留学生を交えての授業は、客観的に日本について考えさせられる良い機会にもなり、また生きた英語も勉強できるので、交換留学をする私にとって大変興味深い授業のひとつです。

勉強とは、まず友達をつくること

商学部ホスピタリティ・マネジメント学科3年 おかだ けいこ 岡田 慶子

【2007年9月～2008年4月カナダ・セント・メアリーズ大学に留学】

私がカナダに行く前のTOEFLのスコアは本当に低く、誰もが驚くような低レベルのものでした。英会話もままならず、言うことも、聞くことさえも出来ない学力のまま、カナダ・ハリファックスへと旅立ちました。唯一自分から話せることは自己紹介、挨拶や聞き返したりする時の決まり切った英文でした。行動力はあっても会話力が乏しかったため、何もできないのが現状でした。私がカナダへ行った時は、二人の先輩と一緒にだったため、行きの空港などでもただ付いていくばかりで、自分で何かをしたとは言い切れません。しかし、現地へ着けば、先輩はいたとしても、一人で生活していかなければならないので、それなりの英語力は必要となってきます。というよりも、私の場合は話せないで、話せるようにならないと生活できないということに気がきました。語学学校でのクラスも日本人が私一人になってしまい、本当に日本語から離れた生活が始まりました。しかし、ここでめげていると、これから先の8ヶ月間が持たないと思い、私は必死にクラスについていこうと頑張りました。図書館で勉強したり、部屋に帰って勉強したり、最初はそういった机の上での勉強をしていました。しかし、単語は覚えても、文法を理解しても、私の会話力は一向上がりませんでした。最初のタームはクラスにつ

いていくためだけに勉強をし、必死になったのを覚えています。しかし、この勉強法では会話力が上がらないと気付いた私は、次のタームからは、友達と遊びに行つて英語で話すという勉強法に変えました。

もともと机に向つて勉強するということが大の苦手だったので、友達と英語で話すということは、本当に楽しく、わからないときはすぐに聞き返し、ハイスピードで会話力を付けていきました。クラスでもメモを取る前に先生に質問し、そして、新しく教えてもらった単語や言い回しなどはなるべく使うように心がけていました。そうすることで使い方がわかるようになり、また、会話を楽しく事もできるようになりました。

留学後半になると、語学学校のほとんどの先生や学生とも友達になり、親密度もアップし、学校生活を楽しめるようになりました。そのころからまた友達と遊びに行くことだけではなく、嫌いな机での勉強を再開しました。英文の本も何冊も読み、私自身、あの時は本当に頑張ったと思います。しかし、今考えると、もっと事前に勉強して行けば今以上に習得して帰つてこられたかなとも思います。

留学中の勉強は本当に大変だったけど、英語を以前より話せるようになったことから友達の輪も広がり、世界を今までよりも知ることができ、人と話せる幸せや、人のぬくもり、友達の大切さなど、学力よりも大切なものを感じ、習得することができたと思います。私の勉強法は、他の人のように机に向かつてする勉強とは違うけれど、私にとっては一番効果的だったなと今、思います。



友人たちとシタデル近くの芝生にて（筆者は中央）



イギリスで学んだこと

外国語学部英米学科5年 まつおか 松岡 ゆき 由起

【2007年9月～2008年5月イギリス・リバプールジョンモーズ大学に交換留学】

今回、私が留学中に勉強した科目について紹介したいと思います。

私は日本にいた頃から異文化理解論や異文化コミュニケーションのゼミをとっていましたので、そういう関連の授業を取りたいと思っていました。

その中でも特に興味深かったのが、Coping with Culture (異文化適応) やTV across Language (テレビ言語) という授業です。

Coping with Cultureは異文化での問題処理というのがテーマで、異なる考え方、習慣の中で自分をどう適応させるかという、まさに異文化理解論のような授業で、ほとんどが留学生の授業でした。

この教科は特に留学生のための授業といった感じで、先生の話すペースもゆっくりで聞き取りやすい内容でした。しかし、積極的に発言することが求められ、最初は他の国の人の発言や英語力に圧倒されてしまい、発言が少なくなってしまい、ただ聞いているだけの授業になっていました。しかし、この授業で出てくる、日本人の「おとなしい・意見を言わない」というイメージ通りになるということが悔しかったので、発言していない時も「自分だったらこう言おう」とか、先生が話していることについて「もし意見を求められたらこう言う」と、いつも頭の中で自分の意見を英語にしていこううちに、少しずつ発言する機会を増やすことが出来ました。

日本ではこういう場合どうなの?と意見を求められることも多く、常に何を言おうかと考えていなければならないので、「英語で考える」という訓練にもなりました。更に、異文化を知る以上に、外国から見た日本を知ることも出来ましたし、日本人としての自分についてより一層考えた気がします。

次のセメスターでは、イギリスのメディアについて学びたいと思い、TV across Languageなどを取ることにしました。

TV across Languageでは、様々な国(イギリス・ヨーロッパ各国・日本・中国等)のニュース番組やCM、コメディ番組を比較したり、文化とテレビの関係を学んでいくものでした。常にグループで座り、グループ内で話し合いをしたり、先生の問いかけについて意見を言うというディスカッション形式のものですが、この授業は、日本の

テレビについて説明したりするというので、すんなりとディスカッションに入っていくことも出来ました。コメディやCMはその文化のみでしか伝わらないものがあったりしますが、最近のCMは世界共通で伝わるものが増えているという印象でした。一番印象的だったことは、コメディについて、日本の芸能人が集まってトークだけをやる番組や、漫才の面白さについて説明してくれと言われたことです。

「笑い」についての異文化理解が一番難しいのではないかと感じた瞬間でした。しかし、「風雲たけし城」(?)という番組がヨーロッパでは流れていたらしく、それは人気があるそうです。こういった驚きの連続で、メディアを通じて意外な文化の発見があるという、私にとっては驚きの連続の授業でした。

また、この授業ではグループワークが多く、2週間に1度グループでレポートを仕上げたりと、授業以外でも集まったりすることもありました。これは時間を守る人、急にキャンセルする人、連絡がない人・・・様々でしたが、そのようなことでも異文化について学んだ点だと思えます。

リバプールジョンモーズ大学では、留学生と正規の学生という垣根がありませんので、全てのことについて自分で動き、正規の学生と同じことをしなければなりません。その分色々な授業が受けられたり、多くの学生と接することが出来るチャンスがあります。普段の友達付き合いだけでなく、グループでどう協力しあうか等、「本当のコミュニケーション」についての大切さを常に感じる、イギリスでの授業でした。



街を見下ろせる、大好きだったリバプールの丘

Leisure and Tourism Marketing

外国語学部英米学科4年 なかがわ ゆりか 中川裕里加

【2007年2月～2007年12月オーストラリア・ラトロブ大学に留学】

この授業はマーケティングの原理を理解することを基本とし、それらを観光、ホスピタリティー、スポーツとレジャー産業の特有の特徴に適応させることを目的とします。計画の過程を通じてマーケティングの供給側に着眼する事ができ、消費者の需要問題の多様性を学ぶことが出来ます。

授業は週2時間の講義と1時間のチュートリアルがあります。成績はチュートリアルの出席、小テスト、中間報告レポート、最終レポート、期末テスト全体で最低50%のスコアがないと単位が取れません。1つでも課題を出さないとその時点で単位を取ることができなくなります。

チュートリアルは20名以下のクラスで、講義の先生とは違いチューターの先生が授業を進めていきます。チュートリアルのクラスでは最初に毎回小テストがあり、講義の復習やそれについてのディスカッションをします。大切なことは、①講義のノートをもとめておくこと②教科書を読むこと③小テストの予習復習をしておくこと④チュートリアルの後にクラスディスカッションのポイントをノートに書きだすことです。このクラスではペアを作ってエッセイを書きます。エッセイ提出の前にプログレスレポートの提出があります。レポートを書くための準備や今後の計画を書きます。最終レポートは①概要②導入③外的要因の調査④SWOT分析⑤マーケティングの目的⑥まとめを入れ最低でも10個の参考文献が必要となります。

講義の方は、どうやってリサーチを進めるのか、設問の設定の仕方、データの集め方などが紹介され、マーケティングの計画過程とSWOT (Strengths, Weaknesses, Opportunities, Threats)の事で、自分たちの計画の強みや弱みなどを分析する方法)といったマーケットリサーチについて勉強します。

また、有名なビーチや遊園地などがあるPort Phillipで行われているイベントの紹介などがあり、これを基にして自分たちオリジナルのイベントを考えました。その他、

マーケティング、製品について、プロモーション、マーケティング・コミュニケーション、価格設定戦略といった内容を学びました。

学部授業では初めてネイティブの学生達と同じクラスになり、語学学校にいた時よりもコミュニケーションの面において苦戦する事がありました。ネイティブの学生達の英語は語学学校で話されている英語より聞きづらく早いので、改めて英語の難しさを感じました。ペアエッセイではオーストラリア人学生と電話やメールで連絡を取り合ったり、2人で図書館で話し合いをしたりする時にも1回では英語が聞き取れずに相手に迷惑をかけたこともあります。しかし、話し合いが進んでいくと次第に自分が相手の英語になれていき、スムーズなコミュニケーションが取れていくことが分かりました。エッセイが完成した時には「良くがんばったね」と言ってくれた事は今でも心に残っています。学部授業は発表をしたりディスカッションをしたりと自発的な行動が求められました。日本では慣れていない事で最初は戸惑うこともありましたが、積極的に行動する事が出来たと思います。学部授業を通じて、行動力を得る事が出来、それを日本に戻ってからの就職活動や学生生活に生かす事が出来たと思います。



一緒にホームステイしていた友達と



留学先での勉強について

外国語学部東アジア学科4年 ^{みやざき}宮崎みどり

【2007年3月～2008年1月中国・深圳大学に交換留学】

深圳大学では留学生クラスが入門・初級・中級・高級の4段階に別れており、日本の小学校の様に一学期間はずっと同じクラスで授業が行われます。各クラス10～30人程度、留学生部全体では200名を越える大所帯です。私は春学期に中級の、秋学期に高級の授業を受けました。

私が一番苦手だったのは“口語”でした。教科書を使って会話練習をしたり、先生の問い掛けに答えたり、時には発表・討論を行うスピーキングの授業です。先生に問われていることはわかっても中国語で何と答えたらいいかすぐにわからない、わかっても発音が悪いために通じない。始めのころはクラスメイトが積極的に意見を出している中でいつも黙っており、先生に当てられても首を振るだけで済ませたり、わかっているのに説明が出来ず「わかりません」と答えたりしていました。

思っている事を少しも伝えられないのがとても悔しく日本語学科の中国人学生に頼んで発音を練習してもらいました。ですが一緒にいるその時はできてもなかなか身に付かず、とにかく中国語を一言も喋りたくなくなった時もありました。

私の発音の悪さが直った切掛けは、中国語の発音を練習する自分の姿が窓に映って見えたことです。それまではきちんと口を動かしていたつもりだったのに、全く動いていなかったということをその時初めて知りました。それからそれを意識して練習するようになり、友人にも先生にも次第に話を通じるようになり、学期末試験での発表では「いつも緊張していてわかっていないんじゃないかと心配だったけど、内容もしっかりしてるし発音も標準的で（訛りがなく）凄く良くできていました、驚きました。」と先生に大変驚かれ、褒められました。

日本人はたいてい“理解”や“精読”といった日本の国語的な内容理解の授業が得意で“口語”が苦手だと言われています。前者は見ただけで漢字の意味がわかるから、後

者は音の少なさが原因なのだそうです。例えば日本語では「ん」は一つしかありませんが、中国語では「n」と「ng」の二つ、韓国語では「m」と「n」と「ng」の三つもあり、その区別をつけるのはなかなか大変でした。逆に他の留学生はどこの国の人でも“理解”や“精読”が苦手で“口語”や“写作”（即興作文）がたいてい得意です。そのため初級までしか特別な発音練習は行われず、多くの日本人にとって“理解”は少し簡単過ぎる、“口語”は難し過ぎるといったことになるかと思います。

留学を通して気がついたのは、日本でしていた勉強の様に「単語をより多く覚える」「どれだけ喋れるようになる」とプラスすることばかりを考えるのではなく、「[shi]と[xi]の区別をはっきりつけられるようにする」「作文から文法のミス無くしていく」など具体的なマイナス点を克服していくことの大切さでした。

春学期、発音のマイナス点に気がつきそれを克服できたことでリスニングや作文など他科目への理解も深まり、春・秋、学校・私生活を通してより実りあるものになりました。今後はこの留学経験で得たものを語学方面だけでなく人生に活かせるよう、常に念頭に置いて努力していこうと思います。



高級班の友人達と深圳大学のキャンパスにて（筆者は左端）

楽しかったベトナム語学習

商学部経営学科3年 よしなが たかふみ
吉永 貴史

【2007年9月～2008年3月ベトナム・ベトナム国家大学ハノイ校に交換留学】

ベトナム語の勉強は、母音が11個あり、声調も6つあったので発音できない、聞き取れないと大変でしたが、とても楽しいものでした。

ベトナム語の授業は日本人留学生が私1人であったため、形式は、先生とのマンツーマンでした。私のときは、ベトナム人の先生が1人とチューター（ベトナムでの私の世話役の学生）が2人の計3人で教えてくれました。授業は週に5回、1日2時間あり、3日間をベトナム人の先生が教えてくれ、チューターがそれぞれ1日ずつ教えてくれました。前回留学された高木さんや前々回留学された権藤さんとはまた違っていたそうなので、少しずつ改善されているようです。先生は日本に留学した経験があり、日本語がとても上手なのでいろいろなことを聞くことができ、日本人の考え方をよく理解してくれる先生でした。チューターの2人も日本語学部の学生なので、日本語をかなり話すことができ、困ることはあまりありませんでした。

授業の進め方としては、先生が文法、発音など全般的に教えてくれ、チューターが発音や最近ベトナムでよく使われる言葉を詳しく教えてくれました。チューターは発音を中心に教えてくれたので、母音や声調の発音練習をして、テキストの会話文を2人で音読したりすることが多かったです。また先生に習った箇所理解が不十分なときは、その復習をしてもらったりしていました。先生には文法を中

心的に教えてもらいましたが、文法のとくにも文章を音読して発音のチェックをしたりしながら進めていきました。またベトナム語に関連した歴史やベトナムの歴史、更にベトナムで生活していくためのベトナム語（値段の聞き方、交渉、食べ物の名前についてなど）も教えていただいたり、実生活に密着した授業だったと思います。そのほかにも、課外授業で街に出かけて買い物をしたり、カフェによってコーヒーを注文したりして、実際にベトナム語を使って会話をしたりしました。その際も、先生が側にいてくれたので、困ったときは助け舟を出してくれたり、私のベトナム語の手直しをしてくれたりしました。また週末には宿題として日記を書かされました。その週にあったことや感じたことなどを書き、次の週に先生が文法のチェックしてくれました。

そんな先生やチューターのおかげで、最初は全く聞き取れない、発音できなかった私が、半年間で、ベトナム人と日常会話ができるようになりました。ただやさしいだけでなく僕が勉強を怠けたときはしっかり注意してくれた3人のおかげで、途中で諦めることなくしっかりと勉強ができました。あまり早く話すことはできませんでしたが、早く話されたら聞き取れないこともありましたが、それでも日常会話で困ることはかなり少なくなりました。また、最初はベトナム人の知り合いがいないと行動できなかったの

ですが、留学の途中から1人で買い物に出かけ値段の交渉をしたり、コーヒーを飲んだりできるようになりました。他には日本人の方とベトナム縦断旅行に出かけたときも、私がベトナム語で通訳して旅行しました。ベトナム人の友達と冗談を言い合うこともできるようになり、一緒に笑ったことは、気持ちが通じ合えたと感じた、本当にすばらしい体験でした。

以上が私のベトナムでのベトナム語の勉強についての報告です。



日本語を教えていた生徒さんたちと（筆者は前列右から4人目）



全力Thailand!

外国語学部英米学科5年 ^{いわした} 岩下 ^{だいすけ} 大輔

【2007年8月～2008年5月タイ・チュラロンコーン大学に交換留学】

私は『タイの東大』と呼ばれているチュラロンコーン大学でThe Faculty of Communication Arts, Bachelor of Arts in Communication Management English Programに在籍し勉強をしてきました。イングリッシュ・プログラムのため開講されている授業はすべて英語で行われます。具体的に何を学んだかという少し本学の英米学科と似たような授業もあるのですが、Speech class, Business letter, News writingという授業をとりました。他にも、Advertising, Thai Culture, Film Class, Music Appreciationという授業もとりました（実際に本学で単位交換が認められ、Public Speaking, Business English, Advanced Writing, 文化人類学、映画英語などの単位を取得することができました）。Thai Cultureの授業では、タイの音楽・楽器、建築、習慣など色んな切り口からタイの文化について学ぶことができました。また、授業の中でフィールドワークがあり実際に世界遺産のアユタヤ、ラーマ5世（チュラロンコーン大学の名前の由来となった）が生活していたウィマンメーク宮殿、タイ舞踊などを見学に行ったりできとても楽しい授業でした。Film Classでは実際に自分たちでショートフィルムを作ることが最後のプロジェクトで夜遅くまでみんなと一緒に撮影などをしたことが思い出として残っています。

しかしながらタイでの留学生活が英語だけで事足りるかというところというわけではありません。御飯を食べる時、タクシーに乗る時、買い物をする時など日常生活の中ではやはりタイ語が必要となってきます。そこで私は大学の授業とは別にタイ語学校にも4ヶ月間ほど通っていました。当時の生活は午前中にタイ語学校（月曜～金曜、9時～12時）へ通い、そのあとそのまま大学に行き授業（基本的に1コマ3時間）を受けるというものでした。

私が通っていたタイ語学校はタイ人が教える少人数制クラスの学校で、日本人だけでなく色々な国の生徒がいまし

た。実際に私のクラスは、シャイなアメリカ人のおじさん、おもしろいコスタリカ人の青年と変な日本人の私、3人のクラスでいつも楽しみながらタイ語を学ぶことができました。今思うと、とてもおもしろい経験だったとおもいます。

他の活動としては、色んなことに挑戦してみようと思ったので、旅行も含め自分にできそうなことは何でも挑戦してきました。旅行では透き通るほどきれいなプーケットの海や、カンボジアのアンコールワットなどが強く印象に残っています。また、実際に4人のタイ人の生徒を受け持ち日本語を教えたり、Wall Street（バンコクで最も大きい英会話スクール。バンコクでの英会話に興味のある方は→<http://www.wallstreet.in.th/jpweb/>）で開かれているビジネスセミナーやイベントに参加したり、タイで働く日本人で構成されているソフトボールチームに参加したりと、とにかく限られた時間の中で、一日一日を無駄にすることがないようにと心掛け全力でタイでの生活を送りました。

今回の留学を通し、本当に素晴らしい経験ができたと思っています。今回の経験を活かし留学を支えてくれた方々へ感謝をしながら、これからも頑張っていこうと思います！



格闘技K-1で活躍するHIROYA選手との一枚（筆者は左）

熊本日記

イ チェ カン
李 在 康

【2007年3月～2008年2月韓国・大田大学校 交換教員】

今日（2008年2月）は久しぶりに先生お二人と昼ごはんを食べました。
昼ご飯が終わって大学へ歩いて入っていく時14号館の側の木に目を向けると、
まだ冬ですが裸の木々の間に春は来ていました。
2007年3月、その見慣れなかった頃の春の光りと似ていました。
いつまた此処で春を迎えるのか・・・

覚えています。

熊本学園大学での最後の採点が終わって散歩しに出た、夜の学内の小さく可愛い庭を。
ほっとしながら寂しい気持ちで彼方此方のんびり歩いていた時
知らずに踏んでしまっていた楠の実の音の面白さを。
ふと見上げた、校庭の暗さを背景に上の方にだけ伸びていたやつれた枝の美しさを。
群青色に染めていた夜空を。

研究棟と本館の間の銀杏から葉っぱが脱げてしまう時を。
そこに駐車していた車の屋根に落ちていた銀杏の色が、一番綺麗に輝いていた瞬間を。
降っている雨のように、銀杏の間を通り抜けて行ってしまう学生の自転車を。

車から研究棟まで歩いて来る僅かな時間でも、下着まで全部濡れてしまう程の激しい暑さを。
図書館2階から見える校庭の真夏の美しさを。

覚えています。

授業中

学生らの表情が明るくかがやいている時を。
学生の目がうとうとし始める時を。

学生食堂の前の庭の銀杏が薄い色の服を着始める時期を。

日曜日や祝日には研究棟も休みを取ると言う事を。
それで、ある日曜日生まれて初めて門（南門）を越えてみた愉快的な経験を。



阿蘇火口にて



覚えています。

自動車初運転の時の怖さを。

初ゴルフの気持ちを。

外国語に対してこわがりだった私に変化し始めている歴史的な事を。

秋頃から偶然習いはじめたギターの先生の片足が不自由な状態で、私の心が痛かった記憶を。

(ギターは実は大学の頃の私からの宿題だった)

これらは私を助けて下さる方々がいらっしゃるからだと言う現実を。

行けなかったけど自宅にまで食事に誘ってくださった方を。

私が挨拶しても何の反応もくれない人たちもいるのに

向こうから話かけて下さって久しぶりに私を和ませていただいた方を。

体が年をとっているよ・・・と騒ぎ始めた事を。

覚えています。

今までの全てのことは熊本学園大学との縁があつての事。

人はまた出会う為に別れる。

また熊本学園大学に來たいから

忘れられないモノをいっぱい持って帰ります。

至れり尽くせりで、本当にありがとうございました。

私の大好きな歌を皆様に贈ります。



大観峰にて

“春を愛する人は心清き人 菫の花のようなぼくの友達
夏を愛する人は心強き人 岩を砕く波のようなぼくの父親
秋を愛する人は心深き人 愛を語るハイネのようなぼくの恋人
冬を愛する人は心広き人 根雪を溶かす大地のようなぼくの母親”

自転車でするやさしい町

ほう 彭 ぼつ 勃

【2008年3月～2008年8月中国・深圳大学 交換教員】

都市にはさまざまな顔がある。徒歩、電車、自動車と、利用する足が違えば、その町に生活している人々や旅行者に見えてくる町の横顔も変わってくる。私は深圳大学の交換教員として熊本学園大学に派遣され、2008年の春から半年間を熊本で過ごした。宿舎から大学まで、いつも自転車で往来し、熊本の美しい風景を身近に感じた。自転車による通勤の日々は、故郷北京の生活の似ていることに気が付いた。

深圳は新興都市のため、生活のリズムがとても速い。私の自宅は大学からそれほど遠くないが、通勤時間をできるだけ短縮したいと思い、車で大学に通うことが多い。しかし、以前北京で暮らしたときの自転車に乗ってのんびりとした通勤生活がやっぱり懐かしくて、いまでも北京に行くとき、なるべく自転車に乗ることにしている。

とにかく快適なのだ。北京は自転車にやさしい町である。どこまで走っても坂がない。都心の幹線道路にも、車道と歩道のあいだに、ちゃんと自転車専用レーンが用意されている。「天安門広場」の周囲も、「西単」のような繁華街も、「前門」の東西に広がる昔ながらの狭い横丁も、自転車で風を切りながら、スイスイと気持ちよく走れる。

築百年くらいの民家の古びた屋根瓦をつきぬけて、雑草が青空にむかって生えている。その雑草のむこうに、なんと、巨大な銀色のUFOが着陸している。よく見ると、人民大会堂の近くにできあがった国家大劇院だった——自転車で北京の路地をめぐると、そんなシュールな「借景」も、どんどん発見できる。

なぜ北京がこんなに自転車にやさしい町かという、貧しい時代が長く続いたからだ。

私が北京を離れ、日本に留学したのが18年前のこと。当時、自家用車をもつ中国人は、ほとんどいなかった。庶民

の通勤の足は、バスか自転車だった。雨の日もカッパを着て、片道10キロ以上を自転車通勤する人も、珍しくなかった。

いまでは北京市民の生活も豊かになり、道路には自動車があふれている。しかし自転車も健在だ。駐輪場や自転車専用レーンなどのインフラも整っている。

これと対照的に、熊本は自転車にやさしくない。私は市内の移動も、なるべく自転車を使うようにしている。しかし熊本城の周囲を例外として、熊本は自転車では走りにくい。駐輪場はどこにでもあるが、駐輪場はあまりない。道路には、自転車専用レーンもない。車道を自転車で走ると、わざと幅寄せして意地悪するドライバーもいる。仕方なく、自転車で歩道を走ることになる。来日した外国人は、それを見てびっくりする。自転車の歩道走行という危険行為を法律で認める国は、世界でも珍しいからだ。

調べて見ると、こうした異常事態の発端は、1964年の東京オリンピックだった。この年、日本では初めて「軽快車」というタイプの自転車（いわゆる「ママチャリ」）の生産台数が、旧来の実用自転車を上まわった。軽快車は、日本独自のタイプの自転車である。中国や欧米には存在しない。軽快車は、実は「軽快」ではない。子供を乗せて買い物に行くには便利だが、スピードが遅く、車道を走ると危ない。

そこで、日本の道路交通法では、1970年から自転車の歩道通行を条件付きで認めるようになった。もともとは道路を整備するまでの変則的措置だったはずなのに、今も続いている。日本の道路事情では、よくある話だ。

日本も中国も第二次大戦の直後は、同じように貧しかった。しかし、日本はいち早く復興し、20年もたたぬうちにオリンピックが開催された。そのため、日本における工業



都市の発展は著しく、企業ビルやマンションが次々と立ち並んだが、自転車用道路の整備は遅れた。その意味では、日本の工業都市の復興は早すぎたのかもしれない。

北京は、貧しい時代が長く続いた。市民が長らく質素な生活を続けてきたおかげで、庶民に暮らしやすい町になった。表通りにこそデパートが建ち並んでいるが、ちょっと裏手に入れば、どの横丁にも小さいな雑貨屋や八百屋が健在である。足腰が弱くなった老人にも、暮らしやすい。自転車も走りやすい。近代都市と、歴史の風景が混在しているシティ。それが北京である。

そのことを知らない人からは、よく北京の表通りのきらびやかさと、裏通りの質朴さのギャップを「格差」だと捉えがちだ。しかし、北京の都心は、高級自動車でも、自転車でも走れる。住民の目線で見れば、「格差」は中国社会の弱みではなく、強みであるのかもしれない。

自転車で熊本を走ると、そんなことも考えさせられる…。

一方、私の半年の交換教員生活は、その収穫は大きい。研究活動や資料収集は順調である上に、数多くの方と友だちにもなった。この場を借りて、手厚く受け入れて下さった熊本学園大学、北古賀理事長、坂本学長、中野国際交流委員長、国際交流センターの皆さんに心よりお礼を申し上げます。ここ、熊本で過ごした時間を大切に、これからも深圳・熊本学園両大学の友好関係に貢献できるように努力していきたいと考えている。

さらに、熊本、熊本学園大学、この地の人々の暖かい心を深圳大学の学生や中国の人々に伝えることができれば、それ以上に嬉しいことがない、と私は思う。



ご夫妻で熊本学園大学キャンパスにて（筆者は右）

韓国見聞録 ～似ているようで似ていない日韓両国～

経済学部教授 ^{おかもと}岡本 ^{とくや} 恵也

【2007年9月から1年間、交換教員として韓国・大田大学校へ派遣】

日韓両国は「対馬」から「釜山（プサン）」に向かって「ヨボセヨ」と呼べば、「な～んだ～い」と答えるぐらい近い距離です。この距離を「指呼の間」と言います。僕はかくほど近い韓国の姉妹大学、大田大学校に交換教授として1年間滞在しました。滞在中、何度も道を尋ねられました。「ごめんなさい。・・・私はハングルはわかりません。」と、ハングルで「ミアナムニダ・・・」までしか言えないので、「I am sorry・・・」と言いました。すると直ぐに韓国人でない、おそらく日本人と分かって放免されました。

かくほど、容貌は僕も韓国に居れば韓国人と見誤れるぐらい日本人と韓国人は相似ています。一度、「水原（スオン）」の「冬のソナタ」のロケ地にもなった「民俗村」で日本人女性観光客3人に「ヨボセヨ」と呼びかけられ、写真を撮ってくれと頼まれました。僕も「ペ・ヨンジュ」と思われたのかなと一瞬錯覚しましたが、「はい、いいですよ」と言ったら、「あら日本人だわ」とがっかりされたようです。「ハイ、キムチー」と言って撮ってあげました。

かくほど外見は似ていても、韓国に滞在して「日本とはちがうな～」という驚きもたくさんありました。大田大学校のキャンパスでまず目についたことは、手をつないでいる男女の学生が多いことでした。そのうち男子の学生同士も時に手をつないでいることに気がきました。大田大学校には軍服を着た軍事学科の「軍人学生」がいます。受講態

度も背筋を伸ばして一般の学生と一味ちがいます。歩くときも颯爽ときびきび歩いています。ところがなんとこの「軍人学生」同士が手をつないで歩いているのではないですか！これに驚いてはいけません。まだあります。ソウルは「デモ」の多い首都です。政府の建物や外国大使館の周辺で若い機動隊員が多数いたるところで警護にあたっています。昼休みに機動隊員がうれしそうに手をつないで何かを買いに行っていました！それよりうらやましかったのは、若い娘さんがお父さんと肩を組んで歩いていました。僕の場合、娘が小学生の高学年になる頃から娘の手に触っただけで怒られました。若い夫も実母と手をつなぐと「日本人妻」から聞きました。日本では離婚のものでよね。韓国ではかくほど近親者の情愛の表現、仕方が濃密なのです。日本人の淡泊さと対照的ですよね。

僕は一人でマイペースで食事するのが好きで、韓国でも一人で外食をすることも多かったのですが、韓国では職場の仲間、家族、友達同士で、それも5～6人以上で食事するのが普通です。一人で食べている人は友達のいない、家族に恵まれない、偏屈な「変人」、「奇人」に見られる可能性もあるそうです。というように、たとえ日本と韓国は「指呼の間」とはいえ、違うことがたくさんあって実に興味が尽きません。これから度々行って日韓の違いをまた発見したいと思います。ヨロブン カムサムニダ。



大田大学校、日語日文学科の学生達と（筆者は前列右から3人目）



「すべてはあのときから……」

商学部経営学科卒業 ^{みうら}三浦 ^{まさこ}雅子 (旧姓：宮本)

【1991年4月～1992年3月モンタナ州立大学に交換留学】

モンタナへの長期交換留学生として女性で初めて選ばれた際には非常にうれしかったことを思い出します。たくさん苦勞と楽しさが交錯したその留学体験はこれまでで一番印象に残った1年であり、現在においてもあの時学んだ語学を活かした仕事をしているため、「すべてはあのときから始まったんだ」と今でも時折その当時の事を思い出します。

そんな1年間の留学を経験した私が大学を卒業してから、まずは熊本外語専門学校の教職アシスタントになりました。その学校には外国人の先生も多数おられ、英語とは縁が切れない職場でした。

約3年勤めた後、思い切って半導体製造装置を開発・製造している東京エレクトロン九州(株)への転職を果たしました。まずは、アメリカでの新工場設立のための立ち上げ部署である海外業務部に配属されました。私は輸出業務の担当となったため、法令関係を含む全ての輸出手法を東京本社にてトレーニングを受け、さらに上司から指導を受けながら業務の立ち上げに携わりました。また、現地社員が製造等の実務トレーニングを受けるために長期出張してきていましたので、彼らのアシスタントも同時にやっておりました。これらの仕事においては語学力が欠かせず、これまで学んできたものが大変役立ちました。また、語学のみならず、海外経験により外国人とのコミュニケーションもスムーズに行うことができました。

その後、結婚、2人の子供の出産のため2度の育児休暇を経て、現在はシステム設計部に配属されております。こちらでは、主に製造装置の仕様書関連の作成に携わり、よ

り技術的な面にも関わるようになりました。担当が欧米顧客であるため、勿論、技術文書の翻訳や会議の通訳も行い、日々英語を活用しています。こちらに勤めて、約13年になりますが、その間で2度海外出張に行く機会もありました。

このような仕事のできたのも、前述したとおり、全ては留学経験があつてのことです。しかしながら、留学経験はきっかけに過ぎないと思います。ご存知の通り、語学力はその後日常的に活用しないとすぐに落ちてしまいます。私は留学後も引き続き勉強し、職場において英語に携わりながら経験を積んできたので、現在においてもおおよそキープすることが出来ているように思います。

社会人としてはまだまだ未熟ですが、壁にぶつかる度にモンタナで苦勞しながらもやり遂げた事が私を奮起させてくれます。ちょっと大げさではありますが、私はあの1年間の体験に常に励まされて生きているような気がします。

これから留学される方、もし英語関連の仕事を希望しているのならば、将来はその貴重な1年間をいかに活用し、どれだけがんばったかにかかっていると思いますので、ぜひそれを意識しながら、(もちろん楽しみながら)、がんばってください。

まだ子供達が小さいため仕事・育児との両立も大変で多忙な毎日ですが、落ち着いたらいつかもう一度モンタナに行ってみたいと思います。まだ手紙での交流が続いている現地の友達とも再会したいです。そして今度はぜひ家族みんなです！これが現在の私の夢です。

最後になりましたが、留学をさせていただいた大学と志文会に改めて感謝いたします。



帰国の途、友達に見送られて～ボーズマン空港にて (1992年)
(筆者は右から2人目)



息子達と共に～自宅の庭にて (2008年)

国際交流写真館

Kimono experience



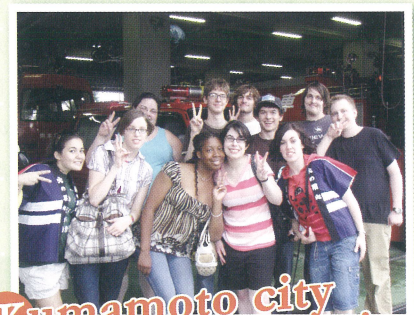
Friendship



Radio appearance



Sports & school festival



Kumamoto city fire service





Aikido practice



Field trip to Mt. Aso



Japanese study



Field trip to Takachiho, Miyazaki



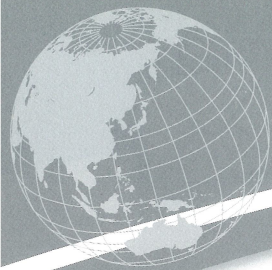


2008年海外往来

| | 交換留学生・教員（派遣） | 交換留学生・教員（受入） |
|-----|--|--|
| 1月 | ユニテックニュージーランド大学（北岡理奈、田邊美保、吉永安里、前川佳子）出発 深圳大学（宮崎みどり、草野彩）、北京外国語大学（金居明宏）、北京語言大学（北里美来）、北京第二外国語学院（木村麻里子）帰国 | |
| 2月 | ラトロープ大学（中山裕加里、石松由衣、小野桃子、本河英志）、北京外国語大学（堤哲也）、北京語言大学（池田昌隆）、北京第二外国語学院（堅島千彰）出発 大田大学校（孫路、松本拓、有岡恵実、菅友見、本田真美、今給黎知佳）帰国 | 大田大学校（権景昊、柳英浩、宋有善、李知映、李世桓、李泓爾、李賢烈、陳成恩）、ベトナム国家大学ハノイ校（チャン・ティ・ミー）帰国 大田大学校（李在康先生）交換教員帰国 |
| 3月 | 大田大学校（吉留夏羽、石井智晴、小林ゆうき、山本洋子、西村康孝）、深圳大学（坂本みどり、諸藤由加里）出発 ベトナム国家大学ハノイ校（吉永貴史）帰国 | 深圳大学（鄺穎儀、李智麗）、北京第二外国語学院（楊華）帰国 大田大学校（韓云愚先生）、深圳大学（彭勃先生）交換教員来日 モンタナ州立大学（ザック・ドー、コール・ライケンバーグ）、リバプールジョンモーズ大学（ヒュー・モー、ケート・リンドリ）、ラトロープ大学（ローリー・ハドサン）、大田大学校（崔斗桓、吉智慧、李スル、金璋鎬、陸正勲、河受旻、朴明恩、林恩恵）、深圳大学（肖一航、黄晓梅）、北京第二外国語学院（崔明清）来熊 |
| 4月 | セント・メアリーズ大学（岡田慶子、佐美三綾）帰国 | ベトナム国家大学ハノイ校（グエン・ティ・チャン）来熊 |
| 5月 | モンタナ州立大学（中村千明、永汐温美）、インカーネットワーク大学（田村聡美）、セント・メアリーズ大学（野中小百合）、リバプールジョンモーズ大学（松岡由起）、チュラロンコーン大学（岩下大輔）帰国 | |
| 6月 | モンタナ大学（松本芳枝）、リバプールジョンモーズ大学（西谷夕夏）帰国 | |
| 7月 | ユニテックニュージーランド大学（吉永安里、前川佳子）、広西師範大学（迫章文／熊本市派遣）帰国 | モンタナ州立大学（サーシャ・ジュリアード）、セント・メアリーズ大学（ジーナ・ホワイトヘッド）、カールトン大学（ダニエル・シュワルツ）、ユニテックニュージーランド大学（デニー・キム）帰国 |
| 8月 | モンタナ州立大学（大村美沙季、西村淳美）、キャロル大学（武藤由貴）、インカーネットワーク大学（平井桃花）、ウィスコンシン大学オークレア校（米田浩之）、セント・メアリーズ大学（宮前紅里、田代彩花、吉永明日美）出発 | 深圳大学（彭勃先生）交換教員帰国 モンタナ州立大学（ダニエル・セトレン、アマンダ・ディグル、ロバート・パートランド、コール・ライケンバーグ）、インカーネットワーク大学（チャンス・グリフィン／熊本市受入）、セント・メアリーズ大学（ピーター・マカーロン）、リバプールジョンモーズ大学（タイソン・パナード、クリス・グリーンヒル、ヒュー・モー、ケート・リンドリ）、ラトロープ大学（ブレンダン・ワン）、チュラロンコーン大学（チャトゥラポーン・リムグン）帰国 |
| 9月 | リバプールジョンモーズ大学（渡辺美里、下田智子、永山由佳、吉川尊徳、鉦之原秀平、金子未来）、ベトナム国家大学ハノイ校（本岩緑）出発 大田大学校（岡本暎也教授）帰国 | 深圳大学（柳木华先生）交換教員来熊 モンタナ州立大学（スティープン・マーニオン、ジョン・ショルツ、イアン・キャンブ）、モンタナ大学（エリン・フレティアー）、キャロル大学（スペンサー・ウィルケンセン）、インカーネットワーク大学（ティファニー・スパイサー、アナ・ガーザ／熊本市受入）、セント・メアリーズ大学（アレクサンドリア・ドゥーガル、レイチェル・ルイス）、リバプールジョンモーズ大学（リアン・ウィットマン、デイビッド・ヒース）、チュラロンコーン大学（ヤーダー・ウォンウツティアナン）来熊 |
| 10月 | | |
| 11月 | ユニテックニュージーランド大学（田邊美保）帰国 | |
| 12月 | ラトロープ大学（中山裕加里、石松由衣、小野桃子、本河英志）、ユニテックニュージーランド大学（北岡理奈）帰国 | |



| 短期派遣・研修団 | その他 | |
|--|--|-----|
| | | 1月 |
| 短期語学ホームステイプログラム（オーストラリアコース） [ラトロープ大学（13名）2/16～3/16] 短期語学ホームステイプログラム（ニュージーランドコース） [ユニテックニュージーランド大学（14名）2/29～3/24] | | 2月 |
| | | 3月 |
| | モンタナ大学 ジョージ・デニスン学長一行（2名）来学 4/7 ラトロープ大学 ジョナソン・ウィス氏来学 4/16 インカーネットワード大学 ルイス・アグニスィ学長一行 （2名）来学 4/21 | 4月 |
| | 中国工商銀行都市金融研究所との国際シンポジウム 5/13 | 5月 |
| | | 6月 |
| 経済学部国際事情研修（ニュージーランドコース）出発 外国語学部海外研修（アメリカコース、韓国コース）出発 第11回大田大学校学生代表団（学生25名、引率3名） 7/31～8/2 | | 7月 |
| 経済学部国際事情研修（中国コース）出発 外国語学部海外研修（ニュージーランドコース、中国コース）出発 経済学部国際事情研修（ニュージーランドコース）帰国 外国語学部海外研修（アメリカコース、ニュージーランドコース、韓 国コース、中国コース）帰国 | | 8月 |
| 経済学部国際事情研修（中国コース）帰国 | | 9月 |
| | 中国工商銀行都市金融研究所との国際シンポジウム 10/13 大田大学校国際生活館落成式（大田大学校） 10/28 ユニバーシティ・カンファレンス（大田大学校） 10/28 | 10月 |
| | セント・メアリーズ大学 新井幸氏来学 11/17 | 11月 |
| | 大田大学校 表昌宣氏、崔化娟氏来学 12/17 | 12月 |



2008(平成20)年度 出身国(地域)別外国人留学生数

春学期

(5月1日現在)

| 地域 | 国籍 (国・地域名) | 学部留学生 | | | | | 研究留学生 | | | 大学院生 | | | | | 留学生 交換 | 合計 | |
|-------|-------------------------|-------|---|----|----|----|-------|---|---|------|----|----|----|----|-----------|----|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 計 | 学部 | 院 | 計 | 1 | 2 | 博1 | 博2 | 博3 | | | 計 |
| アジア | 中国 China | 5 | 6 | 9 | 28 | 48 | 3 | | 3 | 11 | 11 | 2 | | 1 | 25 | 3 | 79 |
| | 韓国 Korea | | 1 | 1 | | 2 | | | | 2 | | | | | 2 | 8 | 12 |
| | タイ Thailand | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | ベトナム Vietnam | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | フィリピン Philippines | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | 1 |
| | ミャンマー Myanmar | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | 1 |
| 欧米 | アメリカ U.S.A. | | | | | | | | | | | | | | | 7 | 7 |
| | カナダ Canada | | | | | | | | | | | | | | | 3 | 3 |
| | イギリス U.K. | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 4 |
| オセアニア | ニュージーランド New Zealand | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | オーストラリア Australia | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 |
| | 合計 | 5 | 7 | 11 | 28 | 51 | 3 | 0 | 3 | 13 | 12 | 2 | 0 | 1 | 28 | 30 | 112 |

【11カ国(地域) 112名】

秋学期

(10月1日現在)

| 地域 | 国籍 (国・地域名) | 学部留学生 | | | | | 研究留学生 | | | 大学院生 | | | | | 留学生 交換 | 合計 | |
|-------|----------------------|-------|---|----|----|----|-------|---|---|------|----|----|----|----|-----------|----|-----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 計 | 学部 | 院 | 計 | 1 | 2 | 博1 | 博2 | 博3 | | | 計 |
| アジア | 中国 China | 5 | 5 | 9 | 27 | 46 | 4 | | 4 | 11 | 11 | 2 | | 1 | 25 | 3 | 78 |
| | 韓国 Korea | | 1 | 1 | | 2 | | | | 2 | | | | | 2 | 8 | 12 |
| | タイ Thailand | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | ベトナム Vietnam | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | フィリピン Philippines | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | 1 |
| | ミャンマー Myanmar | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | 1 |
| 欧米 | アメリカ U.S.A. | | | | | | | | | | | | | | | 8 | 8 |
| | カナダ Canada | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 |
| | イギリス U.K. | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 |
| オセアニア | オーストラリア Australia | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | 合計 | 5 | 6 | 11 | 27 | 49 | 4 | 0 | 4 | 13 | 12 | 2 | 0 | 1 | 28 | 26 | 107 |

【10カ国(地域) 107名】

※「留学」の査証を持っている学生のみ。
※休学者を含まず。



2008年 留学生参加行事

| 名 称 | 主 催 | 内 容 | 期 日 |
|---------------------|------------------------|------------------------------|------------------------|
| 成人式 | 日本現代和装研究会 | 着物の着付けと式典出席 | 1月14日(月) |
| 日米新年パーティ | 熊本日米協会 | 米国人留学生と協会員との交流会 | 2月1日(金) |
| 第25回熊本春節祝賀会 | 熊本県日中協会 | 中国人留学生と協会員との交流 | 2月6日(水) |
| ユネスコ能楽ワークショップ | 熊本ユネスコ協会 | 能面の体験・仕舞の鑑賞など | 2月9日(土) |
| 熊本市広域防災センター見学 | 熊本学園大学 国際交流センター事務室 | 防災センターで消防事情講話と 地震・台風・火災体験 | 4月4日(金) |
| 新入生歓迎バスハイク | 熊本学園大学 国際交流センター事務室 | 阿蘇烏帽子岳登山・足湯体験 | 4月19日(土) |
| お茶会 | 熊本学園大学 茶道部 | お茶会 | 5月28日(水) |
| 第18回 外国人留学生弁論大会 | 熊本学園大学 国際交流委員会 | 本学留学生の日本語による弁論大会 | 6月14日(土) |
| 水無月茶会 | 熊本学園大学 茶道部 | お茶会 | 6月25日(水) |
| 火の国祭り | 熊本東南ローターアクトクラブ | 火の国祭りおてもやん総踊りに参加 | 8月9日(土) |
| 留学生インターンシップ | 熊本県 (社)熊本県貿易協会 | 夏休み中の約2週間、地元の企業で インターンシップ | 8・9月 |
| 熊本市広域防災センター見学 | 熊本学園大学 国際交流センター事務室 | 防災センターで消防事情講話と 地震・台風・火災体験 | 9月18日(木) |
| 市民交流会 | 熊本市南部公民館 | 市民と本学留学生との交流会など | 9月28日(日) |
| 国慶節祝賀会 | 熊本県華僑総会 | 中国人留学生を招いての交流会 | 10月1日(水) |
| 九州地区 国際学生交流フォーラム | 日本学生支援機構 九州支部 | 留学生と日本人学生の交流と 平和学習 | 10月7日(火)～ 9日(木) |
| 体育祭 | 熊本学園大学体育常任委員会 | 体育祭へ参加 | 10月25日(土) |
| 託麻祭 | 熊本学園大学第一部学生自治会 | 学園祭 | 10月31日(金)～ 11月2日(日) |
| 秋の新入留学生歓迎バス旅行 | 熊本学園大学 国際交流センター事務室 | 宮崎高千穂峡・ 五ヶ瀬ワイナリー見学 | 11月8日(土) |
| 日中友好卓球大会 | 日中友好協会 | 卓球による日中交流 | 11月16日(日) |
| 日本文化体験 | 熊本西ローターアクトクラブ | 日本の伝統料理・遊び体験 | 12月7日(日) |
| 留学生スポーツ交流会 | 熊本学園大学 第一部学生自治会学生議会 | 本学日本人学生と留学生との スポーツ交流と懇親会 | 12月20日(土) |



交換教員往来



ハン ウンウ
韓云愚 先生

(韓国・大田大学校)
2008年3月から1年間、交換
教員として韓国語を担当



ホウ ボツ
彭勃 先生

(中国・深圳大学)
2008年3月から半年間、交換
教員として中国語を担当



リュウ ムウホワ
柳木华 先生

(中国・深圳大学)
2008年9月から半年間、交換
教員として中国語を担当

2008年研修団往来

〈受入〉

| 研修団名 | 研修期間 | 団員数 |
|----------------|------------------|-----|
| 第11回大田大学校学生代表団 | 7月31日(木)～8月2日(土) | 25名 |

〈派遣〉

| 研修団名 | 研修期間 | 期間 | 派遣先 | 団員数 |
|---------------------------|-------------------|------|---------------------|-----|
| 経済学部国際事情研修 ニュージーランドコース | 7月30日(水)～8月26日(火) | 28日間 | ユニテック ニュージーランド大学 | 23名 |
| 経済学部国際事情研修中国コース | 8月2日(土)～9月3日(水) | 33日間 | 上海外国語大学 | 8名 |
| 外国語学部海外研修 アメリカコース | 7月22日(火)～8月20日(水) | 30日間 | ベセル大学 | 19名 |
| 外国語学部海外研修 ニュージーランドコース | 8月2日(土)～8月31日(日) | 30日間 | ユニテック ニュージーランド大学 | 27名 |
| 外国語学部海外研修韓国コース | 7月29日(火)～8月25日(月) | 28日間 | 梨花女子大学校 | 16名 |
| 外国語学部海外研修中国コース | 8月2日(土)～8月29日(金) | 28日間 | 吉林大学 | 31名 |



ニュージーランドコース



中国コース

INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE MEMBERS

国際交流委員会メンバー

| | | |
|---|------------------------|--------------------------|
| 国際交流委員長 Chair | 中野裕治 NAKANO, Hiroharu | |
| 商学部 Faculty of Commerce | 小城義也 KOJO, Yoshiya | 吉永心一 YOSHINAGA, Shinichi |
| 経済学部 Faculty of Economics | カーク・マスデン MASHDEN, Kirk | 朴哲洙 PARK, Cheol Soo |
| 外国語学部 Faculty of Foreign Languages | 野田耕司 NODA, Koji | 筒井久美子 TSUTSUI, Kumiko |
| 社会福祉学部 Faculty of Social Welfare | 黒木邦弘 KUROKI, Kunihiro | 吉津晶子 YOSHIZU, Masako |
| 国際交流センター事務室 Office of International Programs | 西村禮二 NISHIMURA, Reiji | 喜佐田知子 KISADA, Tomoko |

OFFICE STAFF MEMBERS

国際交流センター事務室スタッフ

| | | |
|--------------|--------------------------|-------------|
| 次長 (室長兼務) | 西村禮二 NISHIMURA, Reiji | |
| 室長補佐 | 喜佐田知子 KISADA, Tomoko | |
| 係長 | 切通しのぶ KIRITOSHI, Shinobu | |
| | 矢澤恵子 YAZAWA, Keiko | |
| | 下城由紀子 SHIMOJO, Yukiko | |
| | 大洞時子 OHORA, Tokiko | |
| | 栗原隆昭 KURIHARA, Takaaki | 国際交流会館(事務室) |

OFFICE HOURS

窓口業務時間

| | | | |
|-----|---------------|------------|-------------|
| 平日 | Monday-Friday | 9:00~12:30 | 13:30~17:00 |
| 土曜日 | Saturday | 9:00~12:30 | |

CONTACT ADDRESS

問い合わせ先

| | |
|-----------------------|----------------------------------|
| 〒862-8680 | Office of International Programs |
| 熊本市大江2丁目5番1号 | Kumamoto Gakuen University |
| 熊本学園大学 国際交流センター事務室 | 2-5-1 Oe, Kumamoto 862-8680 |
| TEL 096-366-3230 (直通) | TEL +81-96-366-3230 |
| FAX 096-372-4112 | FAX +81-96-372-4112 |

E-mail : ipkgu@kumagaku.ac.jp

URL : <http://www.kumagaku.ac.jp/office/kokko/index.htm>



〒862-8680 熊本市大江2丁目5番1号
TEL 096-364-5161(代)
FAX 096-372-4112
[ホームページ] <http://www.kumagaku.ac.jp/>